野木小学校
同窓会報
第7号
平成4年12月
野木小学校同窓会編集部

ご挨拶

同窓会長　福田善正
武生　第25回卒（昭9）

同窓生の皆様ご無沙汰ばかり致しておりますがお変りございませんでしょうか。

前号では、就任のご挨拶をさせていただきましたが早、本号の挨拶をと、つくづく時の流れの速さに感心しております。本年も第七号をお届けできますことこの上ない喜びと存じます。これも、皆々様の温かいご支援がなければ継続することは到底出来ないことです。幸い会員の皆様の母校を想う心と、絆を深める心が一致してささやかですが発行の運びとなりました。とりわけ出稿者になられた会員の方々には大変なご負担をお掛けしておりますが、十号、二十号へと発展することを願っております。

ところで、私自身は学校と同じ敷地内にいる守り役のようなもので、ゲートボール場への行き帰りなど、いつも小学校の校庭を横切っており、子供達の元気な姿、学校周囲の様子が手にとるようにわかり、心和ませてもらっております。

春は、チューリップが咲き、続いて桜。元気あふれる新入生が仲間に加わりにぎやかそのものです。

夏はプールから高らかな歓声があふれ、花壇にはマリーゴールドの黄色に真っ赤なサルビア。

そして初秋には、行進曲にラジオ体操、応援団の大声が聞こえてきます。また、一人一鉢の小菊が咲きそろう頃にはサツマイモ集会の焚火が燃え上がります。

年が改まって、三月には、卒業式の歌声が静かに聞こえてくることでしょう。

ご挨拶

校長　鹿野公夫
上野木　第38回卒（昭22　旧姓　居関）

同窓生の皆様お変りございませんでしょうか。嘸かしそれぞれの分野で精一杯お励みのことと拝察致しております。

織姫と牽牛は、年に一度の七月七日の夜を楽しみにしております。これも雨で逢瀬の楽しみを奪われることがありますが、同窓会報は確実に懐かしい文と野木の里の空気を運んでくれます。これ偏に同窓会長さんをはじめ役員の方々の熱意の賜と存じます。こんな同窓生のご熱意が、運動に勉強に力一杯頑張る児童達に反映していますことは確か

校舎は立て替えられ昔の面影はありませんが、子供達の活動風景は今昔大差はないように思えます。会員の皆様方も、町内近隣にお住まいの方はもちろんのこと、帰郷されました際は母校へお立ち寄りいただいてかわいい後輩達を叱咤激励してやって下さい。

最後になりましたが、会員御一同様も益々のご活躍とご多幸をお祈り申し上げます。

校長に休みはあっても家庭には休みがございません。家庭は常に週七日制であります。それだけに家庭の温かい教育機能、又、地域の教育力の復活とその充実を発揮するチャンスであるとも言えます。学校と家庭、地域社会が連携をとり、それぞれの教育機能を充分に生かして児童生徒の望ましい人間形成を図ることが大きな課題であります。どうか同窓会の皆々様、二十一世紀を担う児童達に良きアドバイスと舵取りをお願いします。

ところで、本年より本校に、念願の養護教諭が配置され、児童の健康・安全等の指導を担当し、児童達がたいへん喜んでおります。これで他校なみになり、十三名の職員が微力ながら力を合わせ皆々様のご期待に添えますよう誠心誠意努力していきたいと思います。今後とも温かいご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、会員皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げますと共に帰郷の節には母校に是非お立ち寄りいただき、後輩達に励ましの言葉をいただけますことを祈念してご挨拶と致します。

施行規則が改正され、第二土曜が休業日となり「学校五日制」が実施されました。本校もそれに対応すべく育友会が中心となり、年次総会、アンケート、集落懇談会等を実施し、保護者の方々のご意見を聞いて参りました。

野木地区は、幸いにも三世代同居家族が約九四パーセントを占め、文部省のねらいを先取りしたかのように実施されている家庭がほとんどで実にありがたいことです。

です。

さて、九月より学校教育法

竹中先生の遺徳を偲んで

野木公民館長
奥本　実
第34回卒（昭18）

この世は有為転変と申しますが、先生の悲報に接しましたのは、去る六月一日午後のことでした。

先生は日頃ご健康に気をつけられて、悠々自適な生活をしておられると聞いておりましただけに、この度のご逝去は思いもよらず私達は深い悲しみと共に、先生のご遺徳を偲びつつ心から哀悼の意を表すばかりです。

私が先生にお会いしましたのは、去る四月中旬のこと、小浜病院内科診察の待合室で、久し振りに懐かしく先生とお話をしました。

「先生、ご無沙汰していますが、どこか体がお悪いのですか。」「この頃、胃の調子が悪くて…。」「先生は長泉寺の改築委員長として大事業を立派に完成されたそうですね。ご苦労さまでした。その時の疲れが出たのでしょう。」と話しているうちに、看護婦さんの呼名により診察室へ。十分ほど経過して出てこられたので、「先生どうでした。」とお尋ねすると「弱ったわ、午後レントゲンで胃腸の精密検査をするのや…。」

あのときが先生との最後だったことを思い、人生の無常を痛感している次第です。

聞くところによりますと、検査の後、即日入院され腸の大手術をされ、以後看護を続けられたそうですが、六月一日午後二時、遂に永眠されました。告別式は、六月三日自宅で挙行され、三導師様をはじめ多数の僧侶の読経により、しめやかに行われました。

先生は、生涯を立派な教育者として野木小学校児童・生徒の人材育成に一生懸命努力して下さいました。

また、ご退職後は、地域の信望も厚く、地区の発展のため数々の業績をお残しになりました。生前には、山紫水明の地、加茂集落の格式と由緒ある菩提寺「高森山長泉寺」の改築に当たり、地区住民の信望に応じ、改築委員長という重責をお受けになり、昭和五十八年三月、立派に完成されたことは、加茂集落の歴史的大事業の功労者として長泉寺史上、特記されることと思います。

昭和五十八年三月、菩提寺の改築のご功績により、大本山永平寺管長殿より、功労表彰を、更に、昭和六十年七月、仏・法・僧の三宝に帰依し、長泉寺檀徒総代として、菩提寺長泉寺の興隆に尽くされ、教区護持会の発展のため尽瘁されたことにより、大本山永平寺宗務所長殿より、栄誉ある感謝状をお受けになりました。

今は亡き竹中多門先生ですが、生前のご功績とご人徳を高く評価せられ、「泉中院竹影登門居士」という格式高い院号付戒名をお受けになられ、安らかに黄泉の旅をしておられることでしょう。

思えば、今を去る四十数年前のこと。太平洋戦争の最も激しい時で、挙国一致・愛国心・軍国主義教育が叫ばれて、その頃の学校は野木国民学校と呼ばれていました。

当時の校長は井ノ口虎吉先生、続いて早川信一、北川祐先生（現在九十六才でご健在）でした。竹中先生は常に高等科を担任されて、苦しい戦時での学校教育に鋭意努力されました。戦時非常事態で衣・食・住すべてが大変不自由な時代で、校庭には食糧増産のためサツマイモが植えられ、労作教育が中心でした。先生は、この苦しい生活体験の中から、〝物に感謝すること〟を教えて下さいました。

「人間は、ありがたいという感謝することを忘れてはいけない。今、戦争で必死に戦っておられる日本の兵隊さんは、三日も四日も何も食べず、水筒一杯の水を何人もの人と分かち合って飲んでおられる……。」と話されたことを覚えています。

また、農作業の後、スコップや鍬の後始末は、一つ一つ厳しく点検され、少しでも土がついているともう一度川へ行き手でこすってきれいに洗い落とすよう注意された。

「道具を粗末にするような人間はだめだ。道具を大切にし、道具のおかげで楽に仕事ができることを感謝すること……。」というように、先生は体験を通して感謝することの大切さや物や自然に対する畏敬の念を教えてくださいました。

また、昼食後のひととき、「雨にも負けず」の詩人宮沢賢治の詩を読んで〝人間は人のため世のために尽くすことが大切〟〝世の中の人みんなが幸せになるように…〟と言われた。これは、先生の尊い教育信条・人生観であったと思います。

先生は、戦前、戦中、戦後と激動の昭和の時代において、たび重なる苦難を乗り越えられ、私的なことより公的なことを優先され、真実一路、誠実な教育者として学校教育、地域社会の進展に鋭意努力され、立派に七十七年の生涯をお過ごしになり、立派な大輪を美しく咲かせられました。

私たちは、恩師故竹中多門先生のご高恩にお報いするため、先生からお教えいただいた数々のご教訓を人生の糧として、〝世のため、人のために〟微力を捧げたいと思います。

最後に先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

合掌

旧職員からの便り

このごろは

二四代校長　大岸　淳
（小浜市和多田）

先日、新聞でオリンピック選手の荻野正二君が花束を受け取っている写真が目につき、渡している若い女性の後ろ姿は『中学生で同級の塚本広美さんと新田幸子さんの二人』と野木っ子の名前を見て、彼女たちが四年生の時に私と野木っ子たちとの出会いが始まったのだと記憶がよみがえりました。昭和五十四年でした。それから六十三年に退職するまで子どもや保護者、地区の方々や学校職員から、「教頭先生」「校長先生」と呼ばれて有頂天になって勝手放題、横着放題ばかりで汗顔の極み、冷や汗三年の想いもありますが、それだけに楽しかった思い出は多く、いつまでも色あせることもなく鮮やかに脳裏に在って生涯の宝物です。

退職して五年、中名田の山峡で猫の額ほどの田畑を相手に今のところ元気です。

週に一回は老人会のクラブ活動で社交ダンスを習っています。中名田の老人会のクラブには、ゲートボール部、バレーボール部と共に芸能部というクラブがあって民謡踊りやダンスを教えてもらえます。もちろん基本ステップだけですが、ワルツ、ブルース、マンボを一応済ませてこの頃はルンバのステップを踏んで快汗を流しています。部員二十名余り、腰の曲がりかけた者、背中が円くなった者ばかりで他目からはまことに不格好、極言すれば醜悪かも知れませんがやっているほうは結構楽しんでいます。地区内の文化祭や毎年三月の市老人クラブ芸能発表会では、文化会館のステージで披露したりします。

※　※　※

工業団地が完成、操業を始めた工場もあると聞くと、杉山や堤の辺りの変貌はかなりのものだろう、一度、現実を見たいものだと思いながらもまだ果たしていません。通勤していた頃は、二十粁なんて遠いと感じたことはなかったのに、辞めてみると同じ二十粁が意外に遠く感じられます。まだまだ元気だといいながらもやはり確実に年をとっているようです。〈平成四年九月〉

〈待望の校旗新調〉

寄贈　福田善正氏
第25回卒業

旗地　本絹糸先綾錦織袷
寸法六八×一〇〇㎝
刺繍　本金銀糸色糸高級美術総刺繍
フレンジ　改良金糸四段七宝菊結飾房付

〈緑の少年団誕生〉

新入会員紹介

どうぞよろしく!!

満月の　夜は　静かに　ねむるかな　堤　伊藤　梓
黒猫も　えんがわにでて　月見かな　堤　内藤寿樹
いわし雲　空で泳いで　楽しいか　堤　平岡幹也
池に浮く　はすの葉の上　かえるかな　武生　桑原浩幸
大仏や　冬の寒さが　こたえぬか　玉置　奥本芳久
寒雷に　こたつの下で　ちぢこもる　玉置　塚本智一
雨やんで　あじさいの葉に　つゆひかる　上野木　窪田竜矢
ほうせん花　つぶすとポンと　たねがとぶ　杉山　武倉瑠美
しんしんと　粉雪降ると　白い花　杉山　竹村美沙
帰り道　赤や黄色の　木の実かな　杉山　田中智子
流れゆく　落ち葉を追う子　日が暮れる　堤　宮川絵美
子供らが　さくらさくらと　歌うかな　堤　小梶智美
花月夜　薄き光に　さそわれて　兼田　石田友美
里の子と　いっしょにつくる　雪だるま　武生　霜中理恵
森を出て　夏の光に　目がしみる　上野木　清水ちあき
小春日に　猫はのびあがり　あくびをす　上野木　清水美帆

ふるさとへの便り

お地蔵さま

第25回卒（昭9　旧姓　小森）
堤　水江定子

七月末、同窓会事務局から投稿の御依頼を受けまして、はたと困ってしまいました。雑用に追われ久しく文章というものを書いたことがなかったのです。でも、それからは子供のときの思い出が、次から次と走馬燈のように浮かんできて離れません。

今でも兄弟が集まりますと、話に出るのが登下校の思い出です。朝、遅れそうになると兼田のお宮さんの前で立ち止まり、「どうぞ間に合いますように」と、深々とおじぎをしてから走ったものでした。また、吹雪の折は、学校が終わると兄を待って弟と三人、帰り道吹雪がやってくると、「伏せ」という兄の号令に、三人で雪の上に伏して吹雪の止むのを待って歩き出します。それを繰り返しながら帰りました。

色々思い出の詰まった学校への道は、今は舗装され広くなりました。そして、私の生まれ育った家は今はありません。立派な中核工業団地が出来つつあります。先日まで目印の竹藪が残っていましたが、それもなくなり、どこに家が立っていたのか見当もつかなくなってしまいました。でも、地区の発展のためには致し方のないことだと思っています。

井根山の道に面した山裾に、自然石に〝南無阿弥陀仏〟と刻まれたお地蔵さまが立てられていました。何でも昔、山裾の道が狭く険しかった頃、川に落ちて亡くなられた方の供養のために立てられたのだと聞きました。今は何処に置かれているのかわかりませんが、中核工業団地が完成した後は、北川の近くへひょっこり出てきて下さったらなァとそんな夢のようなことも想ったりします。

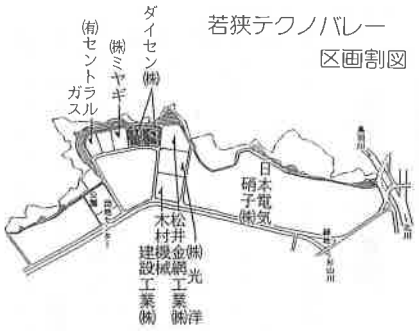
年に一回、クラス会を小林千秋さんが計画して下さいます。それが小学校の思い出につながる唯一の楽しみで、毎年出席させて頂いています。

今は、福井市の郊外に住んでいますので、田んぼもあり、蛙の泣き声も聞こえ、近くには大きな川もあり、時折、犬と散歩する土手には四季折々に月見草、萩の花、合歓の花、振り花などが見られ、子供の頃のことを思い出しながらとても幸せに暮らしております。

家はなくなっても野木小学校時代の思い出は私の胸にいっぱい詰まっています。野木小学校の益々の発展と皆様のご健康を心よりお祈りしております。

（福井市在住）

若狭テクノバレー
区画割図



野木小学校の思い出

第31回卒（昭15）
玉置　奥本裕昭

もう今から五十年以上も前になるが、当時は、校庭のすぐ南に小川をはさんで道があり、この道が縦長の野木村を貫くメーンストリートで、児童の通学路でもあった。また、ちょうど玉置と武生の真ん中あたりに村の役場と駐在所があった。

小川には、フナやメダカ、カエルなどがいて、学校で習った唱歌「春の小川はさらさらながる」を思い出させてくれる懐かしいところであり、学校帰りの腕白小僧たちの恰好の道草の場所でもあった。

近年は降雪量も昔ほどではなくなったようであるが、昔は雪が多く、夜しんしんと雪が降った翌朝には、一面の銀世界の中を、雪を踏み分けて登校するのもそれほど苦にならなかった。放射冷却の激しいよく晴れた月夜のあくる日などには、根雪が凍てつくことがよくあった。こんな朝は、わざと道を歩かず、田んぼの凍った雪の上を歩いて登校したものだった。こういう日には、学校の特別のイキな計らいで、一時間目の授業が北川までの雪の上の小遠足（？）に切り替えられることが、年に一度くらいあったように記憶している。無論、道ではなくたんぼの上を歩いていくのであり、川の堤防の斜面を滑ったりして遊んだあと、学校

へ戻る頃にはけっこう陽が高くなって、凍てついていた雪が柔らかくなり、場所によっては、たんぼの泥に足を突っ込んでどろんこになることもあったが、懐かしい思い出の一コマである。

この懐かしい道や小川も、耕地整理の結果、現在では姿を消し、下野木から井根山まで幅の広い直線道路が走っていて、自動車が高速で行き交っている。たんぼの中を曲がりくねって流れる小川、そのあぜに植えられたハンノキの木立など、幼い頃の脳裏に焼き付いた郷里の田園風景ももう見られなくて寂しい気がするが、この変化もコミュニティ発展のための代償なのであろう。

しかし、私としては、思い返すたびにほのぼのとした懐かしさを与えてくれる、当時の郷里の、そして小学校時代の思い出をいつまでも大切にしたいと思う今日この頃である。

（京都市在住）

私の想い出

第40回卒（昭24 旧姓 田中）

堤　西田光雄

野木小学校を卒業してから早くも四十余年も経ちました。

振り返ると、入学当時はまだ戦中であって、空にはB29の飛来。それに動ずる様子もなく田んぼでは、夏の暑いのに草を取り、米づくりに懸命の努力をされていたあの母ちゃん達の逞しい姿が眼に浮かびます。

学校では、毎日が食糧の増産で校庭（いま運動場）も「サツマイモ」、武生集落の山林を開墾しての「サツマイモ」畑づくり、家へ帰れば農作業の手伝いなどみんなが勉強と共に励んだものでした。

五年生のときだったかなあ、学年別の学芸会で「百姓と水」……（題目は少々違っているかも知れません）と題して、先日、故人になられた尊厳の師、竹中多門先生から教わり二十八名の級友で劇を発表したことがあります。

そのあらましは、……米づくりの中で日照りが続き渇水状態の水田が発生し、集落全体が水不足となった。しかし、集落内の一人の水田のみ湧水に恵まれた。その水を皆んなに配分するよう百姓衆が叫ぶが、頑固なオヤジはガンとして聞かない。テンヤ、ワンヤしている内に百姓衆に説得されて、水を分かちあい、集落の全員で稔りの秋を迎えた。

つまり、協同の心が大切だというストリーだったと思います。

私共の小学時代は、こんな学校生活と家庭生活の中で地域の皆さんに育まれたように思います。私達の子供を見ていると毎日が勉強、勉強。学校で足らず塾まで通う昨今です。変わったという他ありません。

そしていま、私はJA（農協）に勤めさせてもらっていますが幼いときのこんな生活と体験が私の今の仕事の糧になっていると思います。これからも食糧の大切さ、農業の大切さを、そして協同の力の大切さを叫び続けたいと思います。

懐かしい想い出

第48回卒（昭32 旧姓 桑原）

武生　加福幸子

今年の夏は雨が少なく猛暑が続きましたが、それでもひと雨ほしい立秋の頃には、裏庭の日陰では秋海どうの花が色やさしく咲き出しています。

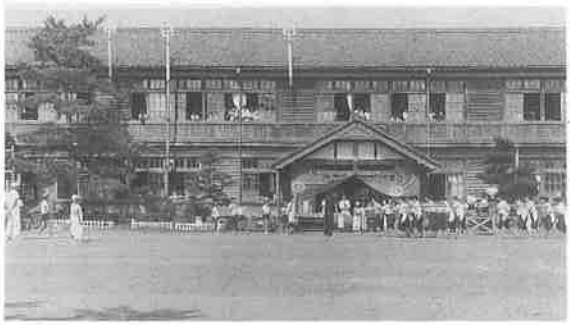
四季折々にふと思い出すのは小学校の頃、夏休みの昼下がりには昼寝の時間もたぬき寝をし、親の目をごまかして河原へ水遊びに田んぼ道を走ったものです。また、近くの小川にはどじょう、メダカ、しじみがたくさんいて、よく取りに行ったり、竹の先に杉の葉をつけて蛍取りもしました。

田んぼでは蓮華の花が一面に咲き、子供心に嬉しくなりころがり遊んでよく叱られました。麦畑にはきじが巣を作ったり、田起こしの時にはたくさんのかもめが虫をついばむ姿や、牛や荷車が行き交いしてた長閑な風景が思い出されます。山野では、しいの実、栗拾いと、今では高嶺の花となり店先で拝見するのがやっとの松茸、その頃はいろんな料理として十分に食べさせて貰った、あの香り、味は忘れられない。放し飼いの鶏の玉

私のふるさと、心のふるさとは、やっぱり野木小学校です。そして、私が社会に出るとき、この野木の生まれであり、永遠の師、故中川平太夫先生のご指導があったのも奇しき縁とその御恩を感じながら、つくづく昔に思いをはせる次第です。

ありがとうございました。

（福井市在住）



子、かしわの本当のおいしさも今では味あえない。

当時の冬と言えばもっと寒く、積雪も多かったように思います。吹雪の時は、すっぽり頭からかぶったマントが身を守ってくれました。家族揃って暖を取った囲炉裏も、ときどき煙に包まれ涙ぐむこともあったが、赤々と燃えた焚火は真から暖かかった。学校ではだるまストーブが焚かれ、その下でアルマイトの弁当箱を温めていたものです。

とにかく、学校まで二、三分という近さに甘え、私は学校を学び舎としてではなく、我が庭先のように毎日遅くまで、けんぱ・缶けり等をして遊ばせて貰いました。校舎も新築され当時の面影がなくなっても、昇降口の隅には、ガッチャンポンプがあり、左手には音楽室、右手には廊下をはさんで購買室と講堂があり、その他いろいろと学校内の様子が思い出されます。

また、両手をついて走ったぞうきん掛け、廊下や講堂は木造ならではの光沢を出し、坂廊下ではよく滑ったことがある。講堂では、チューブ飛び、おはじき、ドッヂボール、劇、映画会と数々の思い出を残してくれている。その他、振り袖姿で踊った学芸会、犬かきが出来るようになった臨海学校、膝小僧を擦りむいた運動会、まだまだ懐かしい思い出が、私の心のアルバムの中に色あせもせず、各ページを飾ってくれています。

戦後初期の教育を受けて育った小学校時代が、私の人生にとって、自然と親しみ、良き環境に恵まれ、最も心に残る素晴らしい時でありました。その思い出を心の支えとして頑張れるのも、お世話になった諸先生、皆様のおかげと感謝致しております。

これからの野木小学校のご発展と会員方々のご健勝をお祈り申し上げます。

（小浜市在住）

道草

第56回卒（昭40 旧妊 奥田）

杉山 猿橋 正子

思い起こせば、私の小学校時代は、わが家の子供達と較べて、良きにつけ悪しきにつけ違いがあります。

杉山に生まれた私は、三年間は、今思えばとてもなつかしい分校時代を過ごしました。一つの教室で、三学年が一人の先生に習うという授業風景は、アットホームで温かい雰囲気だったように思います。もちろん、塾や習い事に追われずのびのびと遊んでいました。

四年生からは、本校ということで、雨の日も雪の日も、バスや車は利用せず、徒歩で一時間からかかって長い道のりを通いました。あの三年間に、丈夫な身体と精神力は少しは鍛えられたのではないかと思います。我が家の子供達は、学校の見える距離に住み、甘やかし過ぎたと反省しながらも、何かの時には、送り迎えをしてしまいます。

晴れた日には、長い道中を道草をしながら、雪の日は、雪遊びをしながら帰りました。帰ってからもファミコンや雑誌などなく、学年を問わず一緒になって、暗くなるまで外で遊びました。

現在、新しくかわった野木小学校舎、道草をしながら歩いた道もきれいに舗装され、以前、私達の通っていた頃の面影がなくなってしまった今も、通るたびに子供達に自分の小学校時代の思い出を自慢気に話してしまいます。中三、小五、小二の三人の子供たちも、地元の小学校で楽しい思い出をたくさん作っていって欲しいと願っています。

私の小学生時代は、今の物の豊富な時代の我が子達と較べれば、家庭的にも、精神的にも、物質的にもハングリーに育ちました。でも、今の子ども達にはできないいろんな経験も積んで育ったように思います。中学、高校時代と大きくなるにつれ、その思い出は、うつろになることが多くても、小学時代の思い出は頭に残っているもの。そのことを思うと、小学校時代の過ごし方が大切な人生の基礎になるように思います。

一人は中学生になりましたが、二人の子ども達を見ていると、自分の小学時代を思い出すことの多いこの頃です。比較は出来ませんが、今の時代に育った子供がしている経験をうらやましく思ったり、自分のしたいろんな経験を体験させてやりたいと思ったりしているこの頃です。

（大飯郡大飯町在住）

野木の里を離れてみて

第65回卒（昭49 旧姓 山本）
玉置 斎藤 淳子

早いもので、私が野木小学校を卒業して二十年近くが過ぎました。短大の二年間を除き、ずっと上中町で生活していたため、ふるさとを特に意識することはありませんでした。若いときは田舎で暮らすより都会の方が楽しかったものです。

しかし、結婚をしてふるさとを離れて生活をしてみて、初めて自分の生まれ育った土地への愛着を感じるようになりました。

現在は、主人の仕事の都合で埼玉に住んでおり、年に一、二度帰省していますが、変わらぬ風景、人の温かさにふれると、ふるさとのありがたさを実感します。

小学校時代の思い出もたくさんあります。何の発表会の時か忘れましたが、全校児童、父母の前で挨拶をしたとき、すごく緊張して次の言葉が出てこなくて「んと、んと……」と何回も繰り返し、恥ずかしい思いをしたことがありました。あのときは、両親も来ているし、「うまく言わなくてはいけない」と、すごくプレッシャーがかかっていたのだと思います。

また、かなりのお転婆であった私はスポーツも大好きで、夏の暑い日にソフトボールの練習をしたこと、町内の小学校の連合体育大会のことも良い思い出となっています。特に、連合体育大会の女子のリレーは、いつも野木チームが一位で、治美ちゃん、真理ちゃん、まゆみちゃんと私の四人で力を合わせて頑張ったのを覚えています。

私の同級生は、男子十人、女子七人の少人数でしたので、まとまりがあり、高学年になっても皆んな仲が良かったように思います。その同級生も今では立派に?父親、母親になっているようです。今まで一度も集まることはなかったのですが、地元の同級生で、この原稿を読まれた方、一度みんなで会える機会を作って下さい。この場を借りてお願いします。

今まで、日々の生活に追われて、なかなか昔のことを振り返ることはありませんでしたが、この原稿を依頼され、その機会を得られたことを感謝いたします。

（埼玉県和光市在住）

グラビア今昔

奉安庫「…節、忠魂碑も…なつかしい」「ホウアンコ??」

牛力　文句も言わず、よく働いてくれました。

JR上中駅
変貌し続ける
上中町の玄関口

できたてのトイレ（右端）は〝行燈〟をモチーフにデザインされたものだそうです。

新高橋
左手前が平成四年十月完成の新高橋、右向う側の旧橋は昭和四十年頃改造。その奥の家並みが下野木集落。

読書感想文入選作品から

「わらってよカバのはいしゃさん」を読んで

一年　森　真奈美

わたしは、このあいだまではいしゃさんにいっていました。わたしは、なんかいいってもいたいから、はいしゃさんはきらいです。

いつも、はをなおしてもらうときは、こわくてちょっとなみだがでます。すると、「いたいか、いたかったらいいなよ。」と、はいしゃさんはきいてくれます。とてもやさしいはいしゃさんです。

でも、どうぶつ村のカバのはいしゃさんは、にこりともわらわないので、こわいカバのはいしゃさんといわれています。わたしは、しんけんなかおをしてちりょうしているからだとおもいました。でも、えをみるとほんとうにこわいかおをしていました。こんなかおだと、わたしも、はをみてもらうのがいやになるなとおもいました。

みんながかえったあと、カバのはいしゃさんは、ほっぺたをおさえてないていました。わたしは、カバのはいしゃさんもはがいたいのかなとおもいました。はいしゃさんなのにはみがきをしていなかったのかなあ、あまいものがすきでたべすぎたのかなあとおもっておもしろかったです。

カバのはいしゃさんは、いそがしくてはいしゃにいけないものだから、むしばがひどくなったそうです。

うちのおかあさんも、とてもいそがしくていっしょにねてとたのんでも、しごとがのこっているからだめといわれます。カバのはいしゃさんも、つぎつぎかんじゃさんがくるので、はいしゃさんにいけなかったんだなとわかりました。

ちょっぴりかわいそうになりましたが、はいしゃさんなのに、「いたいのいやだあ、いきたくないよう。」というので、よわむしだなあ。わたしといっしょだとおもいました。わたしだってよわむしだけど、カバのはいしゃさんのほうが、もっとよわむしかもしれません。

しかたがないので、ゆうきをだして、となり村のワニのはいしゃさんにいくことにしました。いたいのをがまんしないで、はじめからそうすればいいのにとおもいました。

いってみると、ワニのはいしゃさんも、むしばのためこわいかおをしていました。ふたりでなおしっこして、またにっこりわらえるようになってよかったとおもいます。

うしろのひょうしに、カバとワニのはいしゃさんが、はみがきしながらわらっていたので、ふたりとも、いまはちゃんとはみがきをしているんだなとおもいました。

わたしも、いまはむしばがありません。でも、これからもはいしゃさんにいかなくてもよいように、ちゃんとはみがきをしようとおもいます。

「あめんぼがとんだ」を読んで

二年　倉谷和幸

ぼくは、一どだけあめんぼをかったことがあります。でも、えさがわからなかったので、にがしてやりました。

本を読んで、あめんぼは、水めんにおちてきた虫を食べることがわかりました。あめんぼは、くもとにているなあと思いました。どうしてかと言うと、えさをとるのに、あめんぼはなみのようすを足でかんじてさがすことができるし、くもは、糸にかかったときのかんじで虫をとることができるからです。

それに、あめんぼもくもも、じぶんより大きいえさを食べます。だから、にていると思いました。

また、は虫るいがだっぴするのはしっていたけれど、あめんぼがだっぴして大きくなっていくことははじめてしりました。水の上でだっぴできるなんて、すごいなあと思いました。でも、しっぱいしたらしぬなんてかわいそうです。どうして、地めんの上ではだっぴできないんだろう。

水かまきりやゲンゴロウがとぶのはしっていたけれど、あめんぼがとぶところなんて、ぼくはまだ一ども見たことがありません。あめんぼは、水がなくなると空をとんで新しいすみかを見つけるそうです。

そういえば、ぼくは名ごやにいたときに、雨があがったあとの、しゃたくの空地の水たまりに、いつの間にかあめんぼがおよいでいるのを見たことがあります。いつも、どこからくるのかふしぎに思っていました。ちかくに、川もいけもなかったからです。あれは、どこからか水をさがして、やってきていたんだなあということがわかりました。あめんぼは、いったいどれぐらいとおくまで、とべるんだろうか。

あめんぼの赤ちゃんは、水の中で生まれてすぐおよげるなんて、すごいと思います。ぼくたちも、生まれてすぐおよげたらいいのになあ。

あめんぼは、からだがきたなくなると、じぶんであらうこともふしぎでした。からだにごみがつくと、ごみに水がつきおぼれてしまうからです。それで、せなかについたごみを水めんの上でひっくりかえって、水にくっつけてとるのです。どうやってひっくりかえるのだろう。すごいちえをもっているなあと思いました。

あめんぼが、ふゆごしをするなんてしらなかったです。ぼくは、ふゆになるとしんでしまうと思っていました。

「あめんぼがとんだ」を読んで

三年　山田真由美

二年生の時、学校の近くの川で、ザリガニやドジョウ、川ニナ、オタマジャクシ、あめんぼなどをとってきました。次の日にみるとあめんぼだけがいなくなっていました。

「どうしたのかな。」と思っていたけど、えさのある所へとんで行ったのだということが、この本を読んで分かりました。あめんぼがとぶなんて、全ぜん知りませんでした。あめんぼは水の上をすいすいとおよぐだけだと思っていたからです。

あめんぼは、たまごから生まれると、白い体で水面にうかび、しばらくすると黒くなっていきます。あめんぼの水にうつったかげは、重みでくぼんでいる足の先だけ丸く見えて、とてもおもしろいです。どうしてにん者のように水にうくのかふしぎです。体がかるく、長い足がぬれにくくなっているからと書いてありましたが、もう少しくわしく調べてみると、あめんぼの体や足には細かい毛がたくさん生えていて、水をよくはじくことや、足のつめはやや手前にあって、水面のまくをやぶらないようになっていることが分かりました。だからなにもしなくてもういているのです。

あめんぼのおよぎ方は、なんとなく平およぎにていますす。足でかいて、そのあとシューとのばします。わたしは、平およぎを何回やっても手と足がシューとのびる所がうまくできません。あめんぼがうらやましいです。

あめんぼは、水に落ちてきた虫をつかまえて食べるのですごいです。虫の体にストローのようなくだをつきさし、中味をとかしてすいこむのでかしこいなと思います。水の上でじっとまっていて、虫が落ちると、目や足でかんじて近づいてきます。ほかの虫は水が大きらいだけど、あめんぼはへっちゃらです。

あめんぼは、何年ぐらい生きられるのだろう。ふゆごしをしたあと、また、おなじところに帰ってくるのだろうか。

あめんぼは、水めんでくらすけれど、セミのなかまだなんて、とてもふしぎです。でも口だけはセミといっしょです。虫のからだにくだをさして、えきをすいこむところです。

いまは、川の水がよごれて、あめんぼや魚がくらしにくくなっているのは、とてもかわいそうだと思います。

ザリガニのように皮をぬぐこともはじめて知りました。上手にぬげないとおぼれてしまうのに、どうしてりくでぬがないのかなあと思います。いつの水の上にいるのに、雨が苦手だとはちょっとふしぎな気もします。雨ふりの日に見に行くと、一つの場所にかたまっているかもしれません。ごみが体につくと、くふうしてごみを落とすので、とてもきれいずきだなと思います。また、晴れている日は、ちっともまぶしくないそうです。きっと目にまくがかけてあり、サングラスの役目をするのだなあと思います。

「ゴミから地球を考える」を読んで

四年　速水由美子

この本を読んで一番心に残ったことは、おばあさんがあきビン・リサイクルをせいこうさせたことです。おばあさんでもやろうと思えばできるんだなあと思いました。ビンのなかでも、生きビンとか死にビンというのがあっておどろきました。おばあさんの名前は、ふじ田シズエさんといいます。

この本には、病気になってまでゴミのことを調べた人もいるし、お寺にミニ清掃工場を作った人もいました。どれも感心することばかりでした。しかし、一番おどろいたことは、お米をすてることです。まだ食べられるエビやすしやケーキの食べのこしまで、たあめんぼは、住みかをかえる時、空をとぶのです。そして新しい住みかを見つけると、下におりていきます。わたしも一度あめんぼのとんでいるのを見てみたいです。そして本に書いてあったことを一つ一つたしかめたいです。

あめんぼは、水の中にも入れるし、りくにも上がれるし、空もとべてすごいです。こんなこん虫はあまり知りません。夏、プールにいた水かまきりもあめんぼにいるかなと思います。この本を読んで、あめんぼのような小さな虫も、調べてみると、とてもおもしろいということが分かりました。

くさんすてられているのです。私は、なんてもったいないことだろうと思いました。私が食べてあげたいくらいです。こういうのもありました。お祭の日、「あき缶・あきビン一こ一円大作戦コーナー」です。あき缶やあきビンを、マンガ「どらえもん」の口の中に入れるのです。一かん一びんにつき一円をくれます。ちびっこたちは家からあきカンをとってきてなげおわると、会場のすみからすみまでかけずり回って、あきカンをさがします。だから会場にもその回りにもあきカンがなくなっていました。わたしは、なるほど、よく考えた作戦だなあと感心しました。わたしもやってみたいです。

祭の始まる前、十万まいの一円玉を用意したのにおわったら、三万三千まいになっていたということは、六万七千このあきカン・あきビンが拾われたということになります。すごいなあと思いました。こんなことを考えたのは小泉さんという人です。

その後、小泉さんは、「ビンすり大会」や「きたない所の写真コンテスト大会」なども行い、せいこうさせました。よくこれだけのことをかんがえるなあとまた感心しました。さすが「リサイクル・プロデューサー」だなと思いました。

まだまだおどろいたことがあります。なんと外国でゴミのことを調べた人がいるのです。その人の名前は松田美夜子さんと言います。

ある日、松田さんは、スイスの国の山頂にあるゴミ箱にゴミをすてました。ところが、そのゴミ箱には松田さんのゴミだけがすてられていたのです。松田さんは、しまったと思い、急いでもどって、そのゴミをリュックサックの中に入れ、持って帰りました。わたしは、ここの文を読んで、日本の国も自分で出したゴミは、自分で始末をすればいいのになあと思いました。

本の中にある「未来の清掃工場」は、箱の中にもえるゴミ、もえないゴミ、生ゴミを別々に入れます。そして、空気の力で清掃工場におくって、じょう気を発電所に、熱湯を温水プールへ送る清掃工場です。わたしの町、上中町にもこんな清掃工場ができたらべん利だろうなあと思いました。ゴミのないきれいな町に住めたらいいなあと思います。

「夢に向かって飛びたい」を読んで

五年　内藤達志

「毛利さん、エンデバーから見える地球はどうですか。宇宙での実験が成功するといいですね。テレビでの授業はわくわくしながら見ました。とてもおもしろかったです。」

ぼくは今、エリソン・オニヅカのことを考えています。エリソンはハワイ生まれの宇宙飛行士。小さいころから機械いじりが好きな少年でした。物置で、ロケットの実験をしたほどです。ぼくも理科は大好きです。宇宙の本を読んだり、化石を集めたりしています。

ぼくの好きなエリソンの言った言葉、

「アイキャン」

は、「やろうと思えばできる」という彼の考えの言葉です。ぼくは、今まで努力しないで楽をしたい方だったので、この言葉を聞いてやっぱりえらい人はだれでも努力しているんだなと思いました。日本でのスピーチでは、世界のために役立つ人物になること、宇宙開発は人類のために意義あるものだということ、宇宙飛行士は、き険に向かってちょう戦しているが、そのためにじゅう分な訓練を受けているのでこわくないことを話しています。エリソンはいろんな場所で子供達に話しています。毛利さんと同じように子供に夢をあたえているんだと思います。

ぼくは、しょう来宇宙開発に関する科学者になりたいと思っています。そしてダイダロス号のようなロケットを作り出し、太陽系の外までのり出せたらすばらしいです。星をたん険したり、地球のためになることを考えたりしたいです。

エリソンは、最初ディスカバリー号で宇宙に飛びました。それは成功しました。二度目は、チャレンジャー号に乗りました。チャレンジャーとはちょう戦者という意味です。宇宙に可能性を求めて、ちょう戦したのです。でも、打ち上げてから約一分後にばく発が起き、まだ三十九才というわかさでエリソンはなくなりました。テレビでその場面を見たときおどろきました。七人の宇宙飛行士がなくなり、かわいそうです。とても残念です。

その後もアメリカの宇宙開発事業は続けられ、今、エンデバーが飛び立ったのだと思います。エリソン達七人の死から、スペースシャトルはさまざまな改良がなされました。エリソンの夢は、ぼく達の心の中に生きています。エリソンの夢は、エンデバーと一しょに宇宙を飛んでいると思います。

ぼく達の未来では、宇宙旅行がかん単にできるかもしれません。それをかなえるのは、ぼく達です。

「アイキャン」

ぼくも何かはできます。できることがあればやります。エリソンと同じように。

「毛利さん、エリソンの分までたくさん飛んできてください。毛利さんとエリソンの夢がぼくの心に伝わってきます。ぼくも夢にむかってこれから飛びたいと思います。」

「砂漠にねむるミイラ」を読んで

六年　霜中理恵

最近、新聞にミイラの顔が載っていた。それは、コンピュータで作られたものだった。私には、ミイラは包帯を全身に巻いた男の人、というくらいの知識しかなかった。いったい、ミイラとはどんなものか。どこで発見されたのか。ミイラについて詳しく知りたいと思ったのである。

ミイラというと特別なもので、数も少ないだろうと予想していたが、実際は、かなり違っていた。千万、いや億という単位で存在したのだ。古代エジプトでは、奴隷や罪人以外のすべての者がミイラとして葬られていたということだ。その作り方は、干物を作る方法と似ていて、人間をかぎに掛け、乾燥させる。そして、三十日間、三十の塩水の入った水槽にひたして作ったのである。

では、なぜそんな苦労をしてまで作る必要があったのだろうか、と思った。実は、ミイラと宗教と深い関係があった。古代エジプト人は、この世のすべてのものに「カア」という霊魂が宿っていて人間が死ぬと体から離れ、いつか再び人間の体に返ってくると考えていた。しかし、体がないと戻れない。戻るためには、体を何らかの形で残す必要があったのだ。そのため、ミイラというものを考えたのであった。仏教の教えに「輪廻」というものがある。生物が死んで、生まれる過程を永久に繰り返すというものだ。生まれ変わるという点で似ている。だが、一方は同じ人間に戻るという考え。他方は他の生物に変わるという考え。この点で二つは大きな違いがあると思った。世界各地の遺跡から数多くのミイラが発見されている。チリの標高六千メートルもある山頂の地点から、少女のミイラが発見された。ここは、インカ帝国の神殿があったことから、ミイラは最後の王女だったのではないかと言われている。

中央アジアのローランでも若くて美しい少女が発見された。ローランの女王であった。

一般的に言えば、ミイラの多くは、時の王とか身分の高い貴族、神官が現世に持っている権力や宝物を永遠に持ち続けたいという願望から作られたものであることが分かった。

日本には、ミイラがあるのだろうか。日本にはないだろうと思っていたが、存在した。今から二百年ほど前に鉄門海というお坊さんが、各地を行脚した後、六十歳近くになり、郷里に帰ってきて、「即身仏」となった。即身仏とは、自分の体をミイラとして残し、仏さまの身代わりとなり、人々の苦しみを救うことである。この考えは、中国の「蟬蛻（センゼイ）」という考え方が日本に入ってきたのである。自分の命を犠牲にしてまで、他人を救おうとした人が、日本にいたことに驚いたし、日本人として誇らしく思った。

世界には、まだ多くのミイラが眠っている。それらが発見され、研究されることにより、新しい事実が明らかにされるであろう。そんな日が来ることを私は楽しみにしている。

明るい農村ビジョン入選作品から

「都会と農村」

五年　倉谷美聡

最初、私はどこの町でも山はあるんだなと思いました。だけど、名古屋という都会へ転校したとき、山がないことに気づきました。上中町には、たくさんの山があるのに、名古屋はデパートやスーパーはあるのに、山がなかったのです。私は、とてもびっくりしました。

そして、名古屋に住んでいくうちに、ここは大都会だということを知りました。私は、都会は田舎とは全然ちがうなと思いました。そしてずっと住んでいくうちに、ここはデパートとか近くにあってとても便利だなと思いました。地下鉄や海、道路のせつびも整っていました。だけど、海の近くには、火力発電所があってすごいけむりを出していて、はいきガスが多く、自然がないなと思いました。でも、そんな中でも平和公園というところがあって、そこは自然がたくさんあったのでいいなと思いました。

いなかでは、自然がいっぱいあって、すぐそばで山登りができるし、たくさんのこん虫がいたりします。弟は、こん虫が好きなので、夏になるとよくとっています。そして、

友達といろいろ自然の中で遊べるので、とてもいいです。都会では、すぐ近くにはこんな所がないので、遠くまで行かなければなりません。でも、いなかには、へびやこわい虫もいっぱいいます。都会には、近くにそんな虫はいませんでした。

いなかは、田や畑がいっぱいあってとてものどかです。都会はごちゃごちゃしてて、とてもせかせかしています。いなかの夜は、シーンとしているけど、都会は、夜になると特に夏なんかは、バイクの音でとてもうるさくて、なかなか眠れません。

都会は、雪はあまりふらなかったけど、いなかは、たくさん雪がふるので、雪であそべます。昔は、雪を食べたりしながら学校から帰ったそうです。それに名古屋は、すぐ近くに海はなかったのに、いなかはすぐ近くに海があって、すぐ海水よくに行けます。でも都会は、すぐ近くにじゅくやスイミングスクールがあってかんたんにならいに行けたし、マクドナルドやアイススケート場もすぐ近くにあってすぐ行けました。いなかは、あまりすぐ近くにそういうのがありません。

私は、都会もいなかもどちらも好きです。だから、また都会へも行ってみたいです。

「都会と農村」

五年　喜多由紀子

わたしは、五年生になるまで福井市に住んでいました。福井の方が、何かと便利だし友達もたくさんできるけど、田舎の方が空気もきれいで、魚つりやかくれんぼや鬼ごっこなどの遊びが毎日のように出来ます。

ついこの間まで、カラスノエンドウの豆がいっぱいなっていました。いつも下校の時などピーピーならし、友達と音の高さをきそいあったり、リズムで歌の題名のあてっこをしたりして遊びながら帰りました。私は父の生まれ故郷に転校してきて、変わった草花や実がたくさんあるので、毎日の下校が楽しみです。

福井では、カラスノエンドウで遊ぶことなどなく、いつも友達としゃべりながら帰りました。私は、しゃべりながら帰るより、カラスノエンドウの笛を吹いて帰る方が、とっても楽しいです。福井で、なんでこんなおもしろい遊びをしなかったのだろう……。

この間、ピンク色の白つめ草みたいな花の密をすいました。ハチミツみたいな味で、とてもあまかったです。やっぱり田舎だと自然がすぐそこにあって楽しいなあと思いました。福井では密をすえることすら知らなかったのに、こちらの友達はあたり前のようにすっていたので、すごいなと思いました。

田舎は、人数は少ないけれど、水はきれいだし、緑も手のとどくところにたくさんあるのでいい所だと思っています。また、祖父母はきれいに土地改良された田で、肥料をまいたり、草を取ったり、となりの人と腰をのばして、田んぼや稲の話に一生懸命です。福井では田んぼのことなど気にしなかったのに、緑一面の田や、視父母の働く姿を見ていると、昔からこんなにきれいな田んぼだったんだろうかと思いました。

学校の登下校に、いつもきれいな緑を見ているので目の疲れも取れるように思います。だから、わたしは都会も緑があって豊かな方がいいし、もっともっとふやしてほしいです。それに水もきれいにし、緑いっぱいの都会にすると、美しい場所ができ、田舎も都会もかわりがないようにするといいと思います。

緑がすぐ近くにあって、いろんな草花で、遊びを工夫したり育てたりできる田舎が大好きになりました。

編集後記

会員各位のご協力により、ここに第七号をお届けできますこと、編集委員一同厚くお礼申し上げます。

第二号同窓会誌で〝不明〟となっていました波多野悦道さんの住所が判明しました。

小浜市加茂の長泉寺の漆崎住職さんの「長崎に住んでいる波多野という友人はたしか野木小卒と聞いていたが…。」という話がきっかけでした。

波多野悦道さん
第20回卒（昭和4年）
島原市下ノ町一九七五ノ一

同級生の東又四郎、内藤善吾の両氏に連絡しました処、今度の同級会には是非お越し願いたいとのことでした。

＊　＊　＊

今号の編集にあたり、貴重な写真をたくさんの方から提供して頂きました。ありがとうございました。

事務局から

○住所変更や改正された方は速やかにお知らせ下さい。

連絡先　〒919－15　☎0282－五七－一三〇〇
福井県遠敷郡上中町武生　野木小学校